気紛れ発一本松町行き

石塚京助

石塚京助

気紛れ発一本松町行き

新潮社

著者略歴

昭和十九年東京生まれ。写真専門学校を卒業後、雑誌のカメラマン、フリーエディターを経て、六十二年第四回小説新潮新人賞を受賞。

気紛れ発一本松町行き

一九九一年二月一五日　印刷
一九九一年二月二〇日　発行

著　者　石塚京助
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話（業務部）03―三二六六―五一一一
（編集部）03―三二六六―五四一一
振替　東京四―八〇八
印刷　株式会社三秀舎
製本　株式会社植木製本所

© 1991, Kyosuke Ishizuka
Printed in Japan

価格はカバーに表示してあります
（乱丁・落丁本は，ご面倒ですが小社通信係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。）
ISBN4-10-379701-0　C0093

目次

百百目病院 5
胎児教育 31
オフィス街の遭遇 57
ラブダビ航空００１４便 85
いらいら坂 115
大移動説 143
気紛れ発一本松町行き 173

装画・古川タク

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

気紛れ発一本松町行き

百百目病院（ももめ）

1

後藤田は駅前の店で飲み、タクシーをひろって新宿方面にむかった。

新宿の高層ビルの明かりが、タクシーのフロントガラスにおおいかぶさってきたとき、ティッシュに包んで背広の内ポケットにしまってあった小指の先ほどのカプセルを取りだし、生唾といっしょにごくりと飲みくだした。

腕時計をたしかめると、予定どおり零時ちかかった。

三分で効いてくると課長はいった。ほかの場所ですでにその手で成果をあげているという。後部座席にもたれ、後藤田はごほんとひとつ咳ばらいをし、昂りをおさえた。

タクシーが大きくカーブをきり、高層ビル群の裏の大通りを駅のほうにむかったとき、意思とはかかわりなく、からだが外側にゆれた。

「角をまがったところに、セントラルホテルがある。そこのまえれ、おるる……」

舌がもつれた。運転手がバックミラーでのぞいてきたが、赤い顔をして酒くさい息を吐いているので、だれが見ても完全な酔っぱらいだ。

きゅっとかるい音をたて、タクシーがとまった。

金をはらい、ホテルのまえの歩道にでたとたん、光の影が筋をひいてながれた。街路樹があるとおもって手をのばしたがそこにはなにもなく、コートを着た後藤田はそのまままえにのめり、レンガ敷の歩道に片側の頬をつけて腹這っていた。

薬の効きめは意外にはやかった。ひんやりしたレンガと土埃のにおいを嗅ぎながら、あいうえお、とつぶやいてみたら、あううう、といっていた。

花の金曜日、酔っぱらい天国の界隈は人でいっぱいだった。

歩道に大勢の足音がひびき、さっそくだれかがまたいでとおった。

「くうくたおんでうで……」

救急車呼んでくれ、と助けをもとめたつもりだった。頭のなかに、薄手のコートを着て通行人に手をさしのべている自分の姿が浮かんだ。

もうすこしで一時的に口もきけなくなり、泥酔状態と化す。しかし、二時間後には薬がはんぶんきれ、手足もすこしは動かせるようになるのだが。

2

「もしもし、どうしましたか」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

救急車のなかで救急隊の隊員がきいてきた。
「……ろびすぎた」
麻痺した舌と唇を動かし、やっとのおもいで飲みすぎたと答えながら、人がばったと路上に倒れているというのにみんな知らん顔しやがって、この街にいるやつらはばかばっかりだと一人で腹をたてていた。
「なんだまた酔っぱらいか。ひとが働いているときに酒飲んで他人さまの手をわずらわせていい気なもんだな」
救急隊員のつぶやきをきいてがばっとおきあがって反論したくなったが、いかんせん、頭は冴えていてもからだは意思をうしなっていた。
ねらいどおり、ものの五分もいかないうちに救急車は病院についてぱおぱおの音をやめ、すっととまった。
救急車のうしろのドアが開き、担架の上のうつぶせのからだがふわっと浮いた。
下におろされたキャスターつきの担架が、ごろごろ動きはじめた。
カプセルを飲んでから二十分くらいはたっていた。
後藤田は、任官してはじめての仕事にきゅっとからだを固くさせていた。
夜間、その病院は玄関に受付を置かず、なかの診察室で応対することになっていた。ひろい診察室には、酔っぱらいを主とする界隈の患者たちが、診察台兼ベッドに寝かされてならべられているはずだ。

ごとんと音がして担架が方向を変えた。
生温かい空気と、饐えたアルコールの臭いが鼻腔をくすぐった。報告書どおり、週末のその時間、すでに何人もの患者が収容されているようだった。
担架がとまると、頭のほうから足音がちかづいてきた。
「ごくろうさま、こっちの診察台に移してください」
おちつきのある看護婦の声がしたが、歳はまだ若そうだった。
後藤田は腹ばった形のまま、二人の救急隊の隊員に担架から診察台に移された。
「道端に倒れていた酔っぱらいです。怪我もしていないようですけど、とにかく置いていきますので、ここに認めをください」
看護婦も心得ているらしく、すぐに判を押す気配がし、じゃあ明細はのちほどといって二人の救急隊員はでていった。
「もしもし、口がきけますか、もしもし」
看護婦がすぐに肩をゆすってきた。
答えたくてももう舌の感覚がなくなっているのだが、だれが答えてやるものかと後藤田は、両腕で頭を抱えこんだ姿勢でしっかり診察台にふせていた。
「丹下先生、あたらしい患者さんです。ひどく酔っていて答えないんですけど」
看護婦の足音が右手の奥のほうにはなれていった。
くすー、くすーと頭の上のほうから先着の酔っぱらいたちの寝息がきこえていた。

「丹下先生ったら衝立の陰でなにして……あらカヨ子、やあだあ」
なんだろう、なにがあったんだろうと後藤田は、さっそく奥の物音に全神経を集中させていた。
「めっかったかあ、まずいなあ」
四十なかばくらいの男の声がした。
「だって先生ったら、ちょっとさわるだけだからって、きかないんだもん」
もう一人、若い看護婦の声がした。
当直は丹下という男だなとおもいながらも、後藤田は、右手にあるらしい衝立の陰にいる医者と看護婦たちの会話に、え？　と頭をもたげようとしていた。さっきの看護婦の声がアルトなら、甘ったるい高い声のこっちの若い看護婦はソプラノだ。
「さあて、この患者さんはどうしたのかな、ええと」
ちかづいてきた医者が、後藤田の背中に手を置いた。
「頭部挫傷内臓破裂両足切断……おっかしいなあ、ちゃんとしているじゃないか」
すべらせた手で、コートの上から両足をさすってきた。
「先生、それはさっき酔って電車に轢かれて総合病院のほうに移ってもらった人のカルテで……あら先生、お酒飲んでるでしょう？」
アルトの看護婦がいった。
「うっぷ、飲まなきゃこんな酔っぱらい相手の当直なんてやってらんないし、そんなこといってる君だって酒臭いんじゃないの」

「患者さんがもっていたのを、さっきカヨちゃんと二人でいただいたんです。でも先生は手術だってあるんですから、飲んでも酔わないでくださいね」
「わかってる、飲んだってほら、ちゃんとまっすぐ……な、歩けるだろ、いいか、そっちにもどるぞ……な……ほら」
しかしその足音は、たたた、たたたとよろけていた。
いくらウイークエンドの酔っぱらいの町だといっても、病院の医者や看護婦まで酔っているとはなにごとだ。
後藤田のほうに、たたたとはんぶんよろめきかかった医者がちかづいてきた。
「さあてと、じゃあ、この人の名前は?」
「知りません。いまきたばかりで、なにもいわないんです」
「なんだ、それなら死んでんじゃないか。そういうことならひさしぶりに解剖でもしてみようかなあ。腹んなか見たことあるか?」
「ありませんけど」
ばか、酔っぱらいの医者がメスをもったりするまえに、おれが酔ってるだけだってことはやくいえ。
「あら先生、そのメスどこにあったやつですか」
わあ、もうもっていやがった、取りあげろ……。からだを海老状にそらせて上半身をもたげようとしたが、びくともしなかった。

「そこの引き出しのなかにあったやつだけど」
「先生、それは鉛筆削ってるメスですよ」
「死んでんだから、なにで切ったっておんなじだよ。あとで腹にぐるぐる包帯まいとけばわかりゃしないって」
この病院の医者と看護婦はなんだ……おれは酔ったようになっているだけだ、やめろ……。後藤田は診察台にのばした足をひくひくけって叫んだつもりだった。
「でもこの人、もしもしっていうと酒臭い息はいてこんなふうに苦しそうにして、まだ死んでるわけではありません。酔っぱらって動けないでいるだけです」
「なんだ生きてんのか。じゃあ、そのへんに寝かしときなさい。今夜はクダまくやつもいなくて、ええと、こいつをいれて全部で……四、五、六、七、八人いるけど、みんな静かにしていてくれてやれやれだなあ」
後藤田は腹ばったまま、胸でほうっと息をついていた。喉がもうからからだった。
そこが東京の新宿区内所得番付上位の、救急指定病院だということはきいていたが、のっけから脂汗をかかされる、こんな無茶苦茶なところだとは知らされていなかった。
そうか……後藤田はどきっとした。
二級の国家公務員しかいないところに、大蔵省から派遣されてきた超エリートがきたので、わざわざハレンチな病院を選んでおれを送りこみやがったんだ。ちきしょう、こうなったらどんなことがあっても調査を完遂してやるからな。

地域がらその救急病院には、健康保険をもたない現金ばらいの患者が多かった。しかも人件費を節約するため、玄関には受付も置かず、診察室の大部屋の事務デスクですべてを処理するというので、そこにいて記憶さえしっかりさせていれば一人一人の治療の内容と治療代のすべてがわかる寸法だった。診察台にうつぶせの後藤田が患者の数と治療内容を記憶し、後日に提出させた前後一か月間の深夜の患者数や治療内容の明細と、調査をしたその日の内容とを比較し、申告漏れの額を概算するのだ。国税庁の役人にチェックをされたことなど知らないから、病院はなんだろうとおもいながらも例年の申告どおり書類をだしてくる。

3

「あたたたた。頭ぶっつけて、いたいよう」

足もとのほうで甲高い声がした。出入口はそっちになっているらしい。二人づれの足音が廊下を歩いて診察室に入ってきた。

「おでこに大きなこぶたんつくってどうしたんですか」

アルトの看護婦がいった。

「おれ、付添の人だけど、ママの店で飲んでたら、ママがね、ごっちーんて壁に正面衝突しちゃったの」

「あたたたた、ごっちーんて頭打ったのよお」

「血はでてませんし、すぐレントゲン撮りますから住所と名前と歳をいってください」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com